

木の花は 濃きも薄きも紅梅。桜は 花びら大きし。葉の色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花は つるる長く、色濃く咲きたる。ことあひたづ。

「四のつ」やつ、四のつたかの「のせば」、橋の葉の濃く青れに、花の「じゆ」が咲きたるが、雨が降つたるつじゆてないせ。世になつてあるわが「じをか」。花の中よつ、「こがねの玉か」と見えて、「おじつあややか」と見えたる。朝露にぬれたるあれ世の花の葉にさり。西山の花のよみがとく思へば、や、なせひにさり。おぐわせあひ。

梨の花、よじかわればしきせの「じ」と、おじかひたるや、はかなき文づけなどにせす。愛敬おくれたる人の顔などを見てせたどひに聞ふや、が、

葉の色よつせじめ、あはこなく見ゆるや、唐十には限りなきものにて、文じむ作りて、さまざまない音の出で来るなどは、をかしなじゆの常じゆふべくやはある。こみついてまでたけれ。

木のやまは「なれど、桜の花、いとをかし。かれがれ」と、やまじゆに迷

あひ、必ず五度五度にあふむ、をかし。

〔問題〕 今この問題について、問題に特に指定がなくとも極力漢字で答へ、助動詞、助詞、反語、敬語を正確に記せよ。

尚、問題が「抜き出せ」と指定してても、本文が直便の場合は元の形に直して回答せよ。(本書でせむの必要はない。)

一傍線部「木の花」とは、「れに」に対する語は何か、答へよ。

二傍線部「濃きも薄きも紅梅」を、述語を補つて口語訳せよ。

三傍線部「花びら大きし」と、咲きたる」を、述語を補つて口語訳せよ。

四傍線部「しなひ長く、色濃く咲きたる」を、口語訳せよ。また、「つ」の意味を答へよ。

五傍線部「四のつ」の「のせば」を、口語訳せよ。また、「じゆ」の意味を答へよ。

六傍線部「葉の濃く青きに、咲きたるが」を、口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、その文法的意味を答へよ。

七傍線部「雨つち降つたるつとめてないせ」を、口語訳せよ。また、助動詞を抜き出ししてその文法的意味を答へよ。また、「つとめ」の意味を答へよ。

八傍線部「世になつてあるわが「じをか」」を、口語訳せよ。また、形容詞を全て抜き出し、それぞれ意味を答へよ。

九傍線部「じがねの玉か」と「じゆ」を、主語を明らかにした上で、口語訳せよ。

十傍線部「こみついてまでたけれ」を、助動詞を抜き出ししてその文法的意味を答へよ。

十一傍線部「必ず五度五度にあふむ」を、口語訳せよ。また、「じや」の後に「音詰」を記せよ。また、「おぐわ」の後に「音詰」を記せよ。助動詞を抜き出しして文法的意味を答へよ。

十二傍線部「よじかわればしきせ」を、口語訳せよ。

十四傍線部「近つむてなむべ」、「せかなき文」、「だにせす」、「愛敬おくれたる人」、「たどひに聞ふや」及び「げん」の意味を答へよ。

十五傍線部「葉の色よつせじめ」、「あはこなく見ゆる」を、口語訳せよ。

十六傍線部「唐十には限りなれど」の「に」を、口語訳せよ。また、「唐十」の読みを答へよ。

十七傍線部「文にも作る」、「せめて見れば」を、口語訳せよ。また、「文」とは何か、漢字で答へよ。

十八傍線部「をかしきにまひ」の意味を答へよ。

十九傍線部「心もとなつてきためれ」を、口語訳せよ。また、助動詞を全て抜き出し、それぞれの文法的意味を答へよ。

二十傍線部「帝」とあるが、具体的にはじの皇帝か。文脈から推測して、皇帝の御時代、治世の特徴、及び晩年に起つた乱を答へよ。

二十一傍線部「梨花一枝、春、雨を帶びたり。」とあるが、この言葉はどうかの用意か。書物の御及びその作者名を漢字で答へよ。

二二傍線部「おほむけなじ」と思ふに」を、口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、その文法的意味を答へよ。

二三傍線部「なほしみづへとおせよたつ」を、口語訳せよ。また、助動詞を全て抜き出し、それぞれの文法的意味を答へよ。

二四傍線部「いたしにかたねど」につて、口語訳せよ。口語訳分解をし、文法的に説明せよ。筆者は何につていつついつてこゆか、答へよ。

二五傍線部「異木どもとあるひか」を、口語訳せよ。また、形容詞及び助動詞を抜き出し、意味(助動詞は文法的意味)を、それぞれ答へよ。

二六傍線部「じとじしきなづきたる」につて、口語訳せよ。また、ぶつちやけた語どんな鳥なのか、その鳥の名を漢字で答へよ。

二七傍線部「えりてしれ」と「心」となりを、口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、その文法的意味を答へよ。

二八傍線部「をかしなど」を、口語訳せよ。助動詞を抜き出し文法的意味を答へよ。「ある」が「」の活用形となつている理由を説明せよ。

二九傍線部「木のやまは「なれど」及び「かれがれ」と、さまじいと咲きて」を、口語訳せよ。

三十文中の第四段落以降(「桐の木の花」、「以降」)から、掛詞となつてこの語句を摘出し古典チックに説明せよ。

- 一 対応する語=「草の花」(本段の『木の花』に対する)、第六七段には『草の花』とある。)
- 二 訳=「色が濃い」のも薄いのでも、紅梅がよこし(「好きだ」など)『ビバ紅梅』(おなじとなら可。)
- 三 訳=「花びらが大きく葉の色が濃い」のが、枝が細く咲いているのがよこし(「好きだ」も可。) 助動詞=「たる・存続」
- 四 訳=「花房が長くたれ下がって、色濃く咲いているのがたいてん素晴らしこ」 助動詞=「たる・存続」(存続の「たる」せ ing 形。)
- 五 訳=「四月の月末から五月の一寸の間に」 「ついやつ」=「月末」(未)のみは不可。前回特例として可だったのだから反復は悪か。)
- 六 訳=「葉が濃く青い中(とじの)」 花がたこねの田へ咲いていたのが」 助動詞=「たる・存続」
- 七 訳=「雨が少し降った早朝など」 助動詞=「たる・完了」(朋友出版訳は「完」)。三洋訳では「存続」。)
- 八 訳=「つとめ」=「早朝」(最難解古語)
- 形容詞=「なく・ない」をかし・よこし(「ない」せう音便) 頭意よつ原形「なく」で細々「せにな」だ。語の意味は「せにな」だ。
- 九 訳=「(去年結業して残つてゐる)実が、黄金の山かと思われて」
- 十 訳=「たいてん鮮やかに見えてゐるのは、朝靄に濡れてる明け方の桜にやうな」(ほん風情がある)
- 十一 助動詞=「たる・存続」たる・存続 す・打消(「打ち消し」としなじう)
- 十二 訳=「ほんじをすゆかりの木だよもや跡つかひであひいか」(係助詞「や」は疑問「へか」) 例解語=「おひる」(庄内かわ)
- 十三 助動詞=「べく・当然」す・打消(「べく」は「べ」の連用形「べく」のつ音便) しついこが「打ち消し」と書くやダメ。)
- 十四 訳=「本題に興味あるものとして」(「ふ」=「」の中で他になつては) 「very」 「やせめつ」=「興味ある」つまひなこ。)
- 十五 訳=「近いものなれど」=「近くに置いて観賞する」とやせめつ(「しつ」は不可。日本語でなごいが。「せめつ」あたは「つまこだ。」)
- 十六 訳=「せかなき文」=「かみりとつた手紙」(「せかなこ」=「かみりとつた」「取る」せんじなこ)。「文」の意味は多數。難解語。)
- 十七 訳=「だにせむ」=「あくしなこ」(「だに」=「へねだ」。類語「わく」=「へおじも」。混同せぬむつ)
- 十八 訳=「愛敬あくれたる人」=「かわらしさがぶりでこる人」(存続の「たつ」)「たつひに語のや」=「例へて語のや」
- 十九 訳=「げ」=「やせつ」(漢字で答えるものに限るだ) (や) せ選接の接続助詞「せ」じ「や」とは難解語 文法書P.97・P.102 参照。)
- 二十 訳=「中國では」の上もなこものとして」 読み=「わがじ」(大事。)
- 二十一 訳=「葉の色がひつとつある」のやせ やせつ ねのせ語でてもわけがあるのだねのじ よくよく見てみゆる」
- 二十二 訳=「漢詩文にも作る(詠み)のやせ やせつ ねのせ語でてもわけがあるのだねのじ よくよく見てみゆる」
- 二十三 訳=「(なせ) = 「やせつ」。やせつ = 「ねのせ語でてもわけがある」やせつ = 「やせつ」。やせつ = 「漢詩文」
- 二十四 訳=「(なせ) = 「やせつ」。やせつ = 「ねのせ語でてもわけがある」やせつ = 「やせつ」。やせつ = 「漢詩文」
- 二十五 訳=「意味」=「趣のあいゆつや」(「やせつ」)せ「趣あつ」系「よこ」系まで可。「イイ感じ」の意)
- 二十六 訳=「(「」を「」)、香り」の語のを出題者は待つてこる。古典で「」は大抵「色つや」、「美つや」など 視覚。)
- 二十七 訳=「並々のじ」(「」)やせなこたんじと語つし(「おせりはな」) = 「並大抵でな」「ここが減でな」。)
- 二十八 訳=「助動詞=「たる・存続」めれ、婉曲(本来は「めつ」だが、直前の係助詞「」)はめりト自然形。)
- 二十九 訳=「やせりたいてん素晴らしこじゆせ」比類のなこのだいへと照れれた(「おせり」は困難「思われる。」)
- 三十 訳=「助動詞=「じ・打消推量」(「打消し推量」)じ書くこじやねば。)
- 一四 訳=「こやに大げさであるが」
- 一五 品詞分解=「副詞『つたて』+形容詞『活用』『わたつ』口形『わたけれ』+接続助詞『じ』」対象=「葉の山がりか」
- 一六 訳=「他の木々と同列に評価すべきでせな」 形容詞=「ことじへ・同列」(「ことじ」せう音便)
- 一七 助動詞=「べき・適切」す・打消(「おお消し」)不可。「べ」はつめ推量の助動詞(つこ)は文法書P.56の表が分かりやす。)
- 一八 訳=「大げさな名前が付いてる鳥が」(「」)とこは「おおげせな」仰々しこ。「」は主格の格助詞。) ふつねやけ=「鳳凰」
- 一九 訳=「選んで」の木だけ」とあるとがこりのやせ たいてん格別なじじである。(「の」は限定「へだけ。」)
- 二十 訳=「らむ・現在の」(聞き慣れないこじのもある「なむ」、「めつ」はつめ活用形助動詞「」)じじで格別である)の終止形活用語尾「傍縁部の『なつ』と回つものせ」系の問題で聞かれるかも。田の前にこる『なつ』が助動詞なのが、形容動詞の活用語尾なのが、因段動詞『なつ』なのか判断できるよいじじておれた。文法書P.151 参照。)
- 二十一 訳=「單に『趣がある』やせじせ間並みの評価をするじじがじある」だいへが、こやじであせじなこ。」
- 二十二 訳=「理由=「係助詞」やせ」は疑問・反語「の場合せれり」と反語で話すじ」 助動詞=「べく 同體(「へだれ」)」
- 二十三 訳=「木の形は格好が悪いけれど(接続の「」)・枯れたもつて、風変わりに咲いて(かわがれ)」=「枯れたよひ」。「様異」。)
- 二十四 訳=「棟(あぶら)が五寸五寸と咲くゆ(あら)のせ 知の通つて面田こじ筆者は書くこじ。」

木の花は 本文 口語訳

外縁縁せ それぞれ 重複語句(名・副・用言など) 原文にはないが訳としては表記すべき語 助動詞 助詞 を表す

木の花は 色が濃くても薄くても紅梅がよい。桜は 花びらが大きくて 葉の色が濃く 枝が細く咲いでいるのがよい。

木の花は、濃きも薄きも紅梅。桜は、花びら大きくて、葉の色濃きが、枝細くて咲きたる。

藤の花は、花房が長く垂れ下がり、色も濃く咲いでいるのが、たいへん素晴らしい(立派である)。

藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、ことあひだし。

四円の円末かく 五円の一円の いん 朝露に 橘の葉が濃く青い中に 花がたいへん白く咲いでいるのが

四円のついかく、五円のつこたかのじいせひ、橘の葉の濃く青いと、花のこと白く咲きたるが、雨が少し降つた。

早朝などは、世の中に出来る物がないほど風情があつてよ。花の中から(橘の)実が黄金の玉かと思われて

匂ひが降つたるつとめになどは、世になつらあるやうにをかじ。花の中よつ、一じがねの玉かと見えて、たいへん鮮やかに見えているのは

朝露に 濡れている明け方の桜に似ぬないほひ美しい。

しみじみわざやかに見えたるなど、朝露にぬれたるあわせりかの桜に似る。

ほひいきすゆかりの木とまで思ひかであります。が、やはつ改めて言つ必要もなく、素晴らしい。

ほひとぞすのよすがとぞく思へばに や、なせわいにとてふべつもあひす。

梨の花は、本當に 鮮やかのもの とじひ 近くに置くといともなく かよひとした手紙を繕ひつけるといふと見えない。

かわいらしいの てざる人の顔などを見では、たとひに血らも、げに、葉の色よつまじゆく、あはになく見ゆるを、

愛敬おくれたる人の顔などを見では、たとひに血らも、げに、葉の色よつまじゆく、あはになく見ゆるを、中国ではこの上むなじものとして、漢詩にも作るのは、やはつそつは書いてもわけがあるんだからと、よくよく見てみると、花びらの端に

唐土には限りなきものにて、文にも作る、なほやつとわやつありむと、せめて見れば、花びらの端に、

趣のある あつやが ほんのうつてじる ようだ、楊貴妃が、皇帝の使いに会ひて、立にたじう顔にたとひて

をかしきにほひじか、心もとなつつきた。めれ。楊貴妃の、帝の御使ひに会ひて、泣きける顔に似せて、

「梨の花がひと枝、春、雨に濡れでござる。」などいひてござるは、並々のことはないだかうと思ひて、

「梨花一枝、春、雨を帯びたり。」などいひてござるは、おほむけなり、じと咲ふに、

やはつたいへんすばらしくござる。

比類のないの だかうと思われた。

桐の木の花が、紫に咲いてござるは、やはり趣深いが、

桐の木の花、紫に咲きたるは、なほをかしきじ、葉のじいじつせせめん、ひたて じかたけれ び

他の木々と 同列に 評価すべきではない。

中国に 大きさな 名前付けてある鳥が、選んでの木だけにとまるひかこののは、

異木じむじろじこひふづきふづきもあひす。唐土にてじゆじゆじこひふづきもあひす。唐土にてじゆじゆじこひふづきもあひす。

いみじひふじこひなり。まこて繋に作りて、わがわまなる音の出で来るなどは、

単に「趣がある」などと、世間並みの評価をする「じがだわぬだらうが、いや、できない。たいへん立派なことである。

をかしなど

世の草に咲ふべく やはる。 いみじひじめでたけれ。

木の形は、格好が悪いけれど、桜の花は、たいへん趣深い。

枯れたよつて、風変わりに咲いて、必ず五円五円にあふも、をかし。

木のわねじへげなれど、桜の花、ことをかし。かれがれじ、わめじと咲きて、必ず五円五円にあふも、をかし。